

プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の 位置付け

庄 司 史 生

1. はじめに

本研究は、現存する〈般若経〉の内、特に『八千頌般若』(*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*)を中心とする〈拡大般若経〉¹⁾の編纂過程解明を目的とするものである。筆者は既に次の2点について指摘した。

まず、チベット語訳『八千頌般若』(*'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*)には、『現観莊嚴論』(*Abhisamayālaṅkāra*)からの影響により改編がなされる前の梵語原典から翻訳されたテキスト(系統A)と、同論からの影響により改編がなされた後の梵語原典に基づき改訳がなされたテキスト(系統B)といった旧・新2系統のテキストが現存している。つまり梵語原典において、少なくとも2種の『八千頌般若』(以下『八千頌』)が、ある時期まで存在していたといえる²⁾。現行の梵本は新しいテキストである。

次に、チベットにはチベット語訳『八千頌』を3種に分けてとらえる伝承が存在する³⁾。これは、訳語の相違という点からチベットにおいて『八千頌』を3種に分類したものである。このように訳語が異なる数種のバージョンが流布した背景として、梵語原典自体に対する改編が、チベット語初訳の後にもなされたことが関係していると推定される⁴⁾。

以上のように、『八千頌』の展開を考える際には、チベット語訳諸本を手がかりとして、次の2点のフィルターを通して分類することが可能である。

- ① 梵語原典の相違に基づく分類 (庄司 [2009] を参照)
- ② 訳語の相違に基づく分類 (庄司 [2014] を参照)

チベット語訳『八千頌』に関する限り、カンギユルの系統研究の成果の他に、以上の2点をふまえた系統分類を考慮しながら、その編纂過程について考察する必要があるといえる。

プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け（庄 司） (45)

以上をふまえ、本稿ではプダク写本カンギユル所収『八千頌』の位置付けについて考察し、〈拡大般若経〉編纂過程解明の一助としたい。

2. チベットに伝えられる3種の『八千頌般若』とその成立順序

チベットの伝承によると、チベット語訳『八千頌』諸本は、訳語を手がかりとして3種に分類されている⁵⁾。これは経典第1章の前半部にみられる *śreṇika* のエピソード⁶⁾における訳語の相違に基づきチベット語訳諸本を3種に分類するものである。具体的には、梵語 *śreṇika* に対する訳語に *sde can*, *'phreng ba can*, *bzo sbyangs* の3種があることを指すものである。これらの3種が全て現存していることは、筆者の調査により明らかとなっている。カンギユルの系統とあわせて一覧にして示すと以下の通りである。梵語原典の相違に基づく分類は備考に記す。

〔表1 チベット語訳『八千頌』諸本における梵語 *śreṇika* に対する訳語一覧〕

カンギユル系統	諸本	①	②	③	備考
テンパンマ	[L]	<i>gzo sbyangs</i>	<i>gzo sbyangs</i>	<i>gzo sbyang</i>	系統 A
	[T]	<i>gzo sbyangs</i>	<i>gzo sbyangs</i>	<i>gzo sbyang</i>	系統 A
	[S]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
ツェルパ	[C]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
	[P]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
混合	[D]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
	[N]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
独立	[Fa]	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	<i>phreng ba can</i>	系統 B
	[Fb]	<i>phreng ba can</i>	<i>'phreng ba can</i>	<i>'phreng ba can</i>	系統 B
	[Fc]	<i>sde can</i>	<i>gzo sbyangs</i>	<i>bzo sbyangs</i>	系統 A
単独本	[Ht]	<i>sde can</i>	<i>sde can</i>	<i>sde can</i>	系統 B
	[K]	<i>sde can</i>	<i>sde can</i>	<i>sde can</i>	系統 A
	[Tt]	<i>bzo sbyangs</i>	<i>bzo sbyangs</i>	<i>bzo sbyangs</i>	系統 A

以上のように、*bzo sbyangs* の訳語をとるものは主としてテンパンマ系統、*'phreng ba can* はツェルパ系統と混合系統、そして独立系統となる。ただし *sde can* は独立系統のカンギユル、そして単独本としてのみ現存していることがわかる。また、梵語原典による分類とあわせると、*bzo sbyangs* は系統 A、*'phreng ba can* は系統 B に属するものと理解することができる。ただし *sde can* は例外的に系統 A と系統

(46) プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け (庄 司)

Bの両者にまたがっていることになる。以下に3種の成立順序について考察する。

まず従来の研究によれば、Library of Tibetan Works and Archives (LTWA) が所蔵する『八千頌』写本 No. 23476 が *sde can* であり、さらにそのコロフォンに「カマラシーラとペルツェク訳」とあることを根拠として3種の中で *sde can* が最も古いものであると理解している⁷⁾。この点について、従来の研究では未使用の資料([K]と[Ht]等)を用いて検証すると、3種の中で最も古いと考えられるものは、前掲の[表1]にみられるように、古形の系統Aの分類と重なる *bzo sbyangs* となる。一方最も新しいものは系統Bの分類と重なる *'phreng ba can* である。そして、残された *sde can* であるが、[K]は系統Aであるけれども、[Ht]は系統Bである。つまり、*sde can* は *bzo sbyangs* と *'phreng ba can* のちょうど中間に位置付けられるものと考えられる。また *sde can* には梵語原典が異なる旧・新二種 (*sde can* ①と *sde can* ②) が存在することになる(後掲の[図1]を参照)。

3. プダク写本 [Fc] は *bzo sbyangs* か *sde can* か

さて、従来の研究ではプダク写本に収められる3種の『八千頌』の内、第3番目の[Fc]を *bzo sbyangs* としている⁸⁾。たしかに[Fc]の第1葉には *'phags pa brgyasd stong pa gzo sbyangs bzhug s.ho* (下線筆者)と明記されている⁹⁾。ただし、先述した梵語 *śrenika* は経典の中で3回出てくるが、それらに対する訳語が[Fc]においては統一されておらず、1回目のみ *sde can* とし、2回目は *gzo sbyangs*、3回目は *bzo sbyangs* としている(前掲の[表1]を参照)。

ところで筆者は、すでにチベット語訳『八千頌』諸本第1章の比較対照テキスト(稿本)を作成した。紙幅の都合上、ここでの例示は控えるが、その中で[Fc]と[K]とが近似する例が多々見られた¹⁰⁾。

以上について、*sde can*、*'phreng ba can*、*bzo sbyangs* の3種の成立順序とあわせて考察する。[Fc]は *bzo sbyangs* と *sde can* の訳語を持ちながら、その他の経文の比較検討により、[K]との近似性を指摘することができることから、*bzo sbyangs* と *sde can* の中間形態である可能性も考えられる。他のチベット語訳『八千頌』諸本にはこのような訳語の不統一はみられない。

4. プダク写本 [Fc] の位置付け

ところで、プダク写本には何故3本の『八千頌』([Fa], [Fb], [Fc])が収められているのであろうか。従来の研究によれば、プダク写本カンギユル目録には旧・

プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け (庄 司) (47)

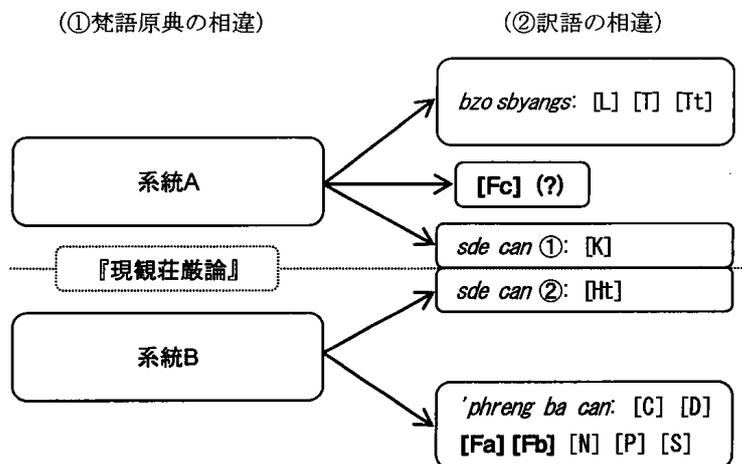
新の2種があり、そして後者の目録において、3種の伝承について言及しているという¹¹⁾。このことから、3種の伝承に基づき3本の『八千頌』をおさめたものと推定されるが、実際のところ3本のうち [Fa] と [Fb] は *'phreng ba can* であり、[Fc] は *bzo sbyangs* と *sde can* の中間形態であると考えられ、3種の全てがプダク写本カンギユル内に伝えられているわけではない。

5. まとめ

本稿で得られた成果をまとめると次の通りである。

- (1) 3種の伝承の成立順序について：梵語原典の相違に基づく分類である系統Aと重なる *bzo sbyangs* が最も古く、系統Bと重なる *'phreng ba can* が最も新しいといえる。*sde can* である [K] は系統A, [Ht] は系統Bである。このことから *sde can* は *bzo sbyangs* と *'phreng ba can* との間に位置付けられる。
- (2) プダク写本 [Fc] は *bzo sbyangs* か *sde can* か：[Fc] は *sde can* と *bzo sbyangs* が混在している。[Fc] と近い経文を有するものは *sde can* の [K] である。このことから [Fc] は *bzo sbyangs* と *sde can* の中間形態の可能性はある。
- (3) プダク写本の位置付け：プダク写本に『八千頌』が3本所収されているのは、チベットの伝承に従いその3種をおさめようとしたものと推定する。そもそも何故同一経典が3種あるのかというと、梵語原典の自体に改編が加えられ、チベット語への初訳以後に改訳する必要が生じたために数種のチベット語訳『八千頌』が流布したのであろう。ただし、現存のプダク写本には *'phreng ba can* が2本収められており、3種全ては収められていない。以上を図示すると次の通りである。

[図1 プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け]



(48) プダク写本カンギユル所収『八千頌般若』の位置付け (庄 司)

- 1) 〈拡大般若経〉とは、漢訳では玄奘訳『大般若』の初会から第五会までを指す (渡辺 [2015] を参照)。
- 2) 庄司 [2009] 他拙稿を参照。要するに、『現観莊嚴論』が『二万五千頌般若』に対する注釈であることをふまえるならば、現存ネパール系梵本『八千頌』の成立は『二万五千頌』よりも後とならなければならない。このことは、『八千頌』の成立と展開を考えた場合、『二万五千頌』等の〈拡大般若経〉全体との関わりにおいて『八千頌』を扱う必要があることを意味する。
- 3) 庄司 [2014] を参照。
- 4) チベット語訳『八千頌』は、前伝期における初訳の後、数度にわたり改訳がなされたことが知られている。諸本によって一様ではないが、例えばナルタン版のコロフォンによると、(1) Śākyasena と Jñānasiddhi と Dharmatāśīla 等による初訳の後、(2) Subhāṣita と Rin chen bzang po, (3) Dīpaṃkaraśrījñāna と Rin chen bzang po, (4) Dīpaṃkaraśrījñāna と 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas, (5) 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas, (6) 'Brom rgyal ba'i 'byung gnas, (7) Blo ldan shes rab, (8) zha lu Chos skyong bzang po (461b5–462a6) によって改訳されたとする。現存する数種のヴァージョンとこれら翻訳者との関連性については現段階では不明である。
- 5) 庄司 [2014] を参照。
- 6) *śreṇika* のエピソードとは次の通りである。sacen nimittato grahītavyā abhaviṣyan na cēha ① *śreṇikaḥ* parivrājakaḥ śraddhām alapsyata | tatra hi ② *śreṇikaḥ* parivrājakaḥ sarvajña-jñāne 'dhimucya śraddhā'nusārī prādeśikena jñānenāvatīrṇaḥ | . . . atra padaparyāye ③ *śreṇikaḥ* parivrājako 'dhimuktaḥ (Wogihara [1932–1935: 50.15–51.13])。]
- 7) Torricelli and Dudka [1999: 33] より転載すると次の通りである。rgya gar gyi mkhan po ka ma ra shi la dang / zhu chen gyi lo tshtsa ba ban de dpal rtsegs kyi sgyur cing zhus te btan la phab pa las slad kyi phan ti ta dharma shri bra [sic] tra dang / zhu chen gyi lo tsha ba dge slong rin chen bzang pos legs bcos te shing btan la phab pa'o // (fol. 350a8)。
- 8) Torricelli and Dudka [1999], 庄司 [2014] を参照。
- 9) ただしこのメモはいつ誰によるものか不明。なお、同様のメモは [Fa] と [Fb] にもみられる。[Fa] の第1葉表には *brgyad stong pa 'phreng ba can bzhug s.ho // dge'o //* と [Fb] の第1葉表には *'phags pa brgyad stong pa 'phreng ba can bzhugs lags so //* とある。
- 10) 庄司 [2012: 287–487] を参照。またその pdf ファイル (A text collated with old and new Tibetan Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā) は academia.edu にてダウンロード可能である (<https://rissho.academia.edu/FumioShoji>)。
- 11) Samten によれば、旧目録: *dKar cha grin chen 'phreng ba* (1696–1706), 新目録: *bKa' 'gyur rin po che'i dkar chag gsal ba'i me long* (1708) である (Samten [1992: 116])。

〈一次文献〉

チベット語訳『八千頌般若』 (*'Phags pa shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa*)

ツェルパ系統: Cone, no. 1001, vol. 77 (C); Peking, no. 734, vol. 48 (P)。

テンパンマ系統: Sher dkar (London), no. 647, vol. 101 (L); sTog Palace, no. 15, vol. 50 (S);

プダク写本カンギュル所収『八千頌般若』の位置付け（庄 司） (49)

Tokyo Tōyō Bunko, no. 31, vol. 44 (T).

混合系統：Derge, no. 12, vol. 33 (D); Lhasa, no. 11, vol. 29 (H). sNar thang, no. 13, vol. 33 (N); Urga, no. 12, Tome 33 (U).

独立系統：Phug brag, no. 838 (Fa); Phug brag, no. 839 (Fb); Phug brag, no. 840 (Fc).

単独本：多田等観将来花巻市博物館所蔵写本 (Ht)；河口慧海将来東洋文庫所蔵写本, no. 334 (K)；多田等観将来東京大学文学部所蔵写本 (Tt).

〈二次文献〉

辛嶋静志 2014「大乘仏教とガンダーラ：般若経・阿弥陀・観音」『創価大学国際仏教学高等研究所年報』17: 449-485.

庄司史生 2009「チベット語訳『八千頌般若波羅蜜多』の系統分類とその基準」『仏教史学研究』52 (1): 1-22 (L).

——— 2012『『八千頌般若経』の研究——その形成と思想——』学位請求論文 (立正大学).

——— 2014「チベットに伝えられる三種の『八千頌般若』について」『印仏研』63 (1): (93)-(98).

渡辺章悟 2015「般若経の諸文献 序」小峰彌彦・勝崎裕彦・渡辺章悟編『般若経大全』春秋社, 3-23.

Samten, Jampa. 1992. "Preliminary Notes on the Phug-brag bKa'-'gyur: A Unique Edition of the Tibetan Buddhist Canon." In vol. 1 of *Tibetan Studies: Proceedings of the 5th Seminar of the International Association for Tibetan Studies Narita 1989*, ed. Ihara Shōren and Yamaguchi Zuihō, 115-120. Narita: Naritasan Shinshoji.

Torricelli, Fabrizio, and Nickolai N. Dudka. 1999. "Manuscript LTWA No. 23476: 'sDe can' Sample of the brGyad stong pa." *The Tibet Journal (summer)* 24 (2): 29-43.

Wogihara, Unrai, ed. 1932-1935. *Abhisamayālaṅkāralokā Prajñāpāramitāvyākhyā*. Tokyo: Tōyō Bunko.

(平成 27 年度科学研究費補助金「若手研究 (B) 課題番号 26770023：般若経の編纂過程に関する研究」による研究成果の一部)

〈キーワード〉 大乘経典, 『八千頌般若』, カンギュル, チベット

(立正大学助教, 博士 (文学))